

創刊から8年。読者の方々からのご支援によりなんとか生き延びてきた本誌ではあるが、学内的にも学外的にも大きな荒波の中に置かれていることを痛感させられる。2017年4月からは、名古屋大学内の複数の部局・部門の統合・再編により人文学研究科が発足し、当センターもこれまでの文学研究科附属から人文学研究科附属に変更となる。人文学に対する風当たりがますます強くなる中で、私たちはアジアをベースにどんな存在意義を示せるのか。静まる気配のない中東情勢からトランプ大統領就任後の混乱状態に至るまでの世界の激動の中で東アジアの地政学的な位置もまた大きく変わろうとしている。私たちはそうした状況を踏まえた上で何ができるのだろうか。そして日本国内では、オリンピックをはじめとする国家的・公共事業的プロジェクトを前に、環境問題は忘却させられている感すらある。6年前の3.11原発事故によってもたらされた被害、さらにはエコロジーに関するさまざまな課題はどれも収束していないどころか、ますます深刻になってきているというのに…。こうした事態のなかで、私たちは研究者として何をすべきなのだろうか。ささやかではあるが本号の特集がたとえ間接的にしろ、これらの問題を改めて考え、議論と行動を促すきっかけの一つになればと願ってやまない。

今回も意欲的な研究論文とレビューの原稿が多数寄せられた。採用できなかった原稿の執筆者の方々も含め、皆さまに感謝申し上げる。他方、学外の方からの投稿が少なかった点を残念に感じている。本誌は、査読を厳格に行う一方で、誰にでも開かれていることを一つの信条としている。次号は、学外からの投稿が増えることを期待したい。

査読の作業はいつも苦勞しているというのが実情である。そんな中、今回も編集委員以外の方々に幾人か依頼したが、快く引き受けてくださった上に充実したコメントをつけてくださり感謝に堪えない。デザインは金武智子さんに、英語の校閲はトーマス・カバラさんに、これまで同様お願いした。センターRAの安井海洋さんと加島正浩さんには入念な校正作業をしていただいた。事務補佐の鈴木希依子さんにはいつも助けられている。本誌はこうしたさまざまな方々に支えられて成り立っている。改めてお礼を申し上げたい。いうまでもなく、もし編集上のミスがあればすべての責任は編集委員会にある。

(藤木秀朗)